

## 1.1.2 教育研究の組織

### 【評価項目 4-0-1】 教育研究の組織

(必須要素) 学部・学科などの組織の教育組織としての適切性、妥当性

### 【評価項目 4-0-2】 教育研究の組織の検証

(選択要素) 教育研究組織の妥当性を検証する仕組みの導入状況

#### <2003年度に設定した目標>

神学部は、創設以来の使命である伝道者育成のために努力してきたが、多様化・複雑化する現代社会の宣教の課題に応えるべく、伝統的なキリスト教神学の領域にくわえて、幅広くキリスト教の思想・文化に関係する領域へと拡充し、これまでの教育研究組織を充実・展開する。

1. コース制に対応した教育研究組織の拡充
2. 多様な教育課題に即した教育研究支援体制の充実

#### (現状の説明)

神学部は、1889年における関西学院の創立とともに、「キリスト教の伝道に従事すべく選ばれた者を鍛錬する」(関西学院創立時制定の「憲法」第二款「目的」)ことを理念として設置された。その後、メソジスト教会各派の合同(1907年)により日本メソジスト教会の関係神学校となった。しかし、戦時下における日本基督教団の設立と全国の神学校の統合政策によって、1943年5月、日本西部神学校、後に日本神学専門学校に吸収され、一時的に閉鎖を余儀なくされた。第二次大戦後、文学部の一学科として再建された神学部は、設立の使命を果たすために、1952年に文学部から独立し、改めて本学の一学部としての歩みを始めることになった。

神学部が教育研究対象とする領域は、神学に関する全領域(聖書学[旧約聖書学・新約聖書学]、歴史神学、組織神学[宗教哲学を含む]、実践神学)であり、これを学部一体で2003年度まで運営してきた。今日におけるキリスト教宣教の課題の多様化、ならびに世界における宗教への関心の高まりに呼応して、近接領域(キリスト教思想、キリスト教文化)のカリキュラムを拡充して、2004年度から入学定員を10名増の30名とし、キリスト教神学・伝道者コースとキリスト教思想・文化コースから成る履修コース制を導入している。

この組織改編にともない近接領域(キリスト教思想、キリスト教文化)のカリキュラムをふくめた領域を、次のとおり計12名の教員が受け持っている。

	2003年度	2004年度(欠員1名)	2005年度(欠員1名)
聖書学(旧約・新約)	5名	5名	5名
歴史神学	2名	2名	2名
組織神学(宗教哲学含む)	2名	1名	1名
実践神学	3名	3名	3名
キリスト教思想	—	1名※	1名※
キリスト教文化	—	1名※	1名※

※ それぞれ組織神学、歴史神学の領域の教員が兼任

2003年度末に組織神学の教員1名が退職し、2004年度末に歴史神学（キリスト教文化の領域を兼担）の教員1名が退職した。2005年度に歴史神学の教員1名を補充したが、現在、学部全体で1名の欠員となっている。開かれた神学部を目指しているが、当面、学部における教育研究組織の大幅な改組は検討されていない。また、学部教育・研究の補助者として、教務補佐4名、教学補佐5名を置いている。

加えて現組織の中におかれた各種委員会の活動をとおしてさらに幅広い教育研究活動に取り組んでいる。生涯学習、または神学部における研究教育の成果の社会的還元を目的として、学外講座委員会を設置し、毎年定期的に「教職セミナー」および「キリスト教教育研究会」を企画・開催している。また、神学部主催講演会などを企画している。さらに、キリスト教主義教育のための学部内組織として、礼拝委員会を設置し、週日中毎日開催されるチャペルを運営するほか、キリスト教教会暦にしたがって、特別の礼拝・キリスト教行事をおこなっている。

また、本学に設置されているキリスト教と文化研究センターでは、神学部教員がセンター長および主任研究員（2名）として選任されており、学部宗教主事・宗教センター宗教主事・宣教師との緊密な連携のもとに、総合大学における学際的なキリスト教研究に中心的な役割を果たしている。2004年度のコース制の導入とともに、キリスト教と文化研究センターから複数分野専攻制（MDS）による「キリスト教と文化」に関するプログラムが移管され、MDS委員会を通じて、キリスト教と文化研究センターと協力しつつ、全学に向けて開放されたプログラムを提供している。

これら教育研究組織の妥当性を検証する場として教授会がその役割を担っているが、具体的な事項については、すでに設置されている将来構想委員会に付託され、その検討にもとづいて不断に改善を行う仕組みになっている。

#### （点検・評価の結果）

2004年度のカリキュラム改訂にあわせて、キリスト教思想・キリスト教文化に教育研究領域を拡張し運用がなされており、教育研究組織も現在において適切に機能している。現行の入学定員30名に対し、学部としての教育研究組織は妥当である。神学の学問領域および近接領域は、相互の関連が密接であり、ひとつの領域だけにとどまらない幅広い学修が求められるため、学際的な領域が拡大しているものの、現在のところは現状が適切であると判断している。入学定員増や教員組織を考えた場合の問題点も多いが、将来的に現行履修コース2コースを学科として編成することも視野におきつつ、教育研究組織を整備する可能性も検討し得ると考えている。

教務補佐・教学補佐による教育への支援体制は、授業資料の準備、授業のための機材の設置・操作など最低限の水準を確保し得ている。しかしながら、教育支援設備の高度化や、また情報教育・語学教育における支援など、まだまだ充実すべき課題が残されている。

教育研究組織において、現在、組織神学領域に1名の欠員があり、また歴史神学領域の教員が退職したため、この教員が兼ねて授業担当していたキリスト教文化の領域について、検討する必要がある。

(改善の具体的方策)

教育研究組織については、組織神学領域およびキリスト教文化領域において改善すべき課題があり、現在、それぞれ次のような方策で対応している。(1) 組織神学領域については、これまで主に宗教哲学を担当した教員が組織神学専攻を兼ね、組織神学分野の教育研究を担い、同時に、隣接する実践神学領域の教員の協力を得て運営をおこなう。(2) キリスト教文化の領域は、今日、教育上のニーズが高まっていることを考慮して、専門教員を配置することとし、現在、補充採用のために努力している。今後、キリスト教文化をふくめた学際的領域について教育研究組織の整備が必要となる。これについては、神学研究科の整備・拡充との整合性を勘案しつつ、今後も引き続き、将来構想委員会で検討をすすめる。

授業支援については、現在の教務補佐・教学補佐の業務内容を十分に精査して、授業支援の可能性を検討する。